青藍会会報

第103号

令和6年6月

徳島大学医学部医学科同窓会

徳島大学大学院医歯薬学研究部子どもの保健・看護学分野
教授　森　健治

善入寺島にはたくさんのひまわりが咲きます。毎年飽きない，初夏の風景です。

撮影　西 内　　健（医学部24期）

青藍会総会開催のご案内

日　時：令和6年7月15日（月）海の日 10時30分～16時00分

場　所：ハイブリッド開催（青藍会館大会議室・Zoomによるリモート）

1 議　事（10:30～12:30）

2 昼休憩（12:30～13:20）

3 2023年度青藍会賞の発表及び授与（13:40～）

4 2023年度青藍会賞受賞講演（13:50～14:20）

佐　藤　正　大　先生（医学部52期）
徳島大学大学院医歯薬学研究部呼吸器・膠原病内科学分野准教授
演題「肺線維症の病態解析と新規診断法の開発」
座長　西　岡　安　彦　先生

5 学術講演（14:30～16:00　1人40分　質疑応答含む）

大　日　輝　記　先生（医学部42期）
香川大学医学部皮膚科学教授
演題「皮膚の生体防御と慢性炎症」
座長　久　保　宜　明　先生

池　田　康　将　先生（医学部43期）
徳島大学大学院医歯薬学研究部薬理学分野教授
演題「生命金属元素「鉄」の新たな役割」
座長　赤　池　雅　史　先生

リモートでの参加をご希望の方はメールにてご連絡をお願いいたします

青藍会事務局　seiran@tokushima-u.ac.jp

会場へお越しいただける方は6月28日（金）までに会報送付時に同封の「出席ハガキ」にてご連絡をお願いいたします

巻　頭　言

育てる

青藍会副会長
坂　東　智　子（医学部25期）

徳島の医学教育には長い歴史があり，会報や多く書物でも紹介されております。阿波の医学史に関しては，「医者のみた阿波史」の著者である福島義一氏が「徳島大学医学部五十年史」において，また板東浩氏が「阿波の名医」において詳細に記されております。近代産科学の創始者である賀川玄悦（1700-1777）は阿波藩の藩医にも任ぜられており，その９代目玄庵は，漢方を廃し西洋医学を採用すべくそれまでの阿波藩医師学問所（1795創設）から新しく明治３年（1870）藩医学校を開設した当時の教授となりました。赤ひげ先生として親しまれた関寛斎（1830-1912）は，1863年阿波藩医として赴任，藩医学校の開校準備に尽力し校長となっております。1880年創設徳島県立徳島医学校は1886年廃校となりましたが，1943年徳島県立医学専門学校が創設され現在の徳島大学医学部へと続いております。

さて，現在の医学教育については，絶えず学修成果を見直すことで医学教育の改革が行われております。まず医学科は，基本的な臨床能力及び基礎的な医学研究能力を備え，生涯にわたり医療，教育，保健・福祉活動を通じて社会に貢献し，医学の発展に寄与することができる人材の育成を目的としています。１～２年次の教養教育，基礎医学に始まり３～４年次には社会医学，PBL チュートリアル教育による系統別病態診断，医学研究実習，CBT，OSCE，５～６年次は診療参加型臨床実習（学内外）及び実習後 OSCE があります。そのような忙しい中課外活動にも積極的に参加しております。MD-PhD コースに進学，留学される方もおり，一昔前と比べ勉学に努め優秀な学生が多いと感じております。

そして，赤池雅史研究部長が100号記念特別企画座談会で述べられたように，2018年度医学教育分野別評価の審査を受けた際に，次のような特記すべき良い点があると評価されました。医学部教育支援センターがカリキュラム開発，学修方法，評価方法の開発に関与していること，８か月にわたる「医学研究実習」を採用することで学修意欲を刺激するカリキュラムになっていること，カリキュラム専門委員会および教育プログラム評価委員会に学生が参画しており，学生教員懇談会で学生が積極的に意見を述べることができていること，徳島県地域医療総合対策協議会を中心に，医師団体，医療者団体，行政機関との連携を作っていること等です。

ところで，青藍会では，令和５年度より卒業生のみならず在学生も正会員となることで，正会員は7,000名以上となっております。そして，青藍会では会員相互の親睦とともに，医

学科に様々な支援を行っております。医学科学生への支援としては医学科教育設備への寄付，青藍会奨励賞，青藍会スポーツ奨励賞，MD-PhD 奨励金授与，MD-PhD 海外留学生支援，Student Doctors への白衣授与，学生用手術着の寄贈，卒業生への記念品贈呈，学生による講演会への支援などがありますが，正会員となった学生と直接交流する機会も増えたことにより，闊達な意見交換ができ，希望する支援を検討するようになっております。卒後も卒後臨床研修センターへの寄付，若手研究者への青藍会賞授与など様々な支援をしており，受賞された研究者の多くが指導者になられております。

また，徳島大学病院卒後臨床研修センターでは，四国のみならず全国にある協力病院において，特に地域医療研修では県内の協力病院，診療所や徳島市医師会等の施設で研修ができ，学生実習と同様多くの青藍会の先輩方にお世話になっております。

今後も徳島に限らず全国におられる青藍会の先生方そして多くの医療人にご協力いただいて，学生や研修医を育てていただきたいと心から願っております。

目　次

○題　　字……森　　健　治
○写　　真……西　内　　健
○青藍会総会開催のご案内
○巻　頭　言……坂　東　智　子
○徳島大学医学部長西岡安彦先生が第60回ベルツ賞１等賞受賞
　第60回「ベルツ賞」１等賞を受賞して……西　岡　安　彦…… 2
　西岡安彦教授のベルツ賞受賞を祝して……荒　瀬　誠　治…… 3
○徳島大学病院長香美祥二先生がアジア小児腎臓病学会名誉会員賞受賞……香　美　祥　二…… 4
○青藍会の助成活動
　青藍会スポーツ奨励賞の授与…… 5
　青藍会奨励賞の授与…… 6
　徳島大学病院卒後臨床研修センターの活動報告……岩　田　　貴…… 7
○青藍会賞募集…… 8
○新入生歓迎会…… 9
○支　部　紹　介……13
○支部だより
　北海道支部……石　丸　裕　晃……15
　東　京　支　部……上　田　　茂……15
　　石　井　保　夫……16
　兵　庫　支　部……小　川　達　司……18
　岡　山　支　部……宇　野　昌　明……19
　広　島　支　部……志　馬　伸　朗……20
　九　州　支　部……武　井　実根雄……21
○病院だより……医療法人医誠会国際総合病院　谷　　幸　治……22
○特　別　寄　稿
　吾がゴルフの記……島　　健　二……24
○会　員　通　信
　故三好和夫第一内科教授の臨床講義より（昭和42年）……渡　辺　圀　武……26
　青藍会 OB よりの伝言……岡　　一　成……26
　歴史的名医の医療哲学と幸福の認識……板　東　　浩……27
　2024年３月は最終講義ラッシュに……本　田　壮　一……28
　11期生第22回同窓会報告……山　下　剛　利……29
　第13期生の同窓会を開催して……森　本　忠　興……30
　徳島大学医学部第14期生（43会）同窓会2024 in 高知 ……渡　辺　圀　武……32
　16期生 令和６年新年同窓会 ……齋　藤　義　郎……33
　医学部第18期生卒後50周年記念同窓会を開いて……村　田　　豊……34
　31期同窓会報告　～琵琶湖のほとりで８年ぶりに～……三　上　靖　夫……35
　俳　　句……小　谷　雄　二・雫　　俊　一・駒　木　幹　正・真　鍋　正　広……37

○書 籍 紹 介
「おとな女子の漢方」……橋 本 一 郎……38
○徳島大学の動き
徳島大学大学院医歯薬学研究部新任教授紹介……泌尿器科学分野 古 川 順 也……39
顕微解剖学分野 寺 井 健 太……40
徳島大学病院新任教授紹介……安全管理部 池 本 哲 也……41
○徳島大学大学院医学研究科 MD-PhD コース修了 ……宮 田 晃 志……42
○徳島大学 MD-PhD コース同窓会報告 ……荻 野 広 和……43
○青藍会学生広報委員紹介 ……天 野 利 哉……44
小 林 由紀彦……44
○学 生 だ よ り
全医体優勝について……平 野 和 樹……45
西日本医科学生総合体育大会を終えて……石 田 卓 朗……46
地域医療の実践に向けて……佐 藤 薫……47
○青藍会の動き
青藍会出身教授一覧……48
病院長就任のご挨拶……香川県立丸亀病院 伊 藤 嘉 信……49
徳島県鳴門病院 住 友 正 幸……49
医学部70期卒業生（令和６年３月卒業）……50
会 員 の 異 動……51
物 故 者……52
青藍会会費納入状況……53
会費納入のお願い・会費の納入について・振り込みについてのお願い……54
事務局からのお願い……55
○投 稿 規 定……56
○第41回青藍会・医学科講演会開催のお知らせ……57
○編 集 後 記……高 橋 浩 子……58

★支部総会開催のお知らせ

各支部会員の先生方は奮ってご参加ください

香川支部総会　令和６年６月29日（土）リーガホテルゼスト高松にて

近畿支部総会　令和６年７月20日（土）18時　ホテルグランヴィア大阪にて

兵庫支部総会　令和６年10月６日（日）12時～15時　ホテルヴィスキオ尼崎にて

会報第102号より「支部総会開催のお知らせ」を掲載いたしております。
支部総会開催のお日にちが確定しましたら青藍会事務局までお知らせください。

徳島大学医学部長西岡安彦先生が第60回ベルツ賞１等賞受賞

徳島大学医学部長の西岡安彦呼吸器・膠原病内科学分野教授が，第60回（2023年度）「ベルツ賞」の１等賞に選ばれた。ベルツ賞はドイツの製薬会社ベーリンガーインゲルハイム社が，日本とドイツ両国の歴史的な医学の交流関係を更に深めていく目的で，1964年に創設した伝統のある医学賞で，正式名はエルウィン・フォン・ベルツ賞という。ベルツ博士は明治９年に来日し，東京大学医学部の前身である東京医学校で教鞭をとり，大勢の日本人医学者を育てるとともに，皇室の侍医を務め日本の近代医学の発展に大きな功績を残した。ベルツ博士の名を冠した同賞は，毎年，時宜に応じたテーマで論文を募集し，すぐれた論文に１等賞と２等賞が授与される。

第60回のテーマは「間質性肺疾患」で，西岡安彦教授の「肺線維症に対する抗線維化薬開発：がんと線維化肺の接点を捉えたトランスレーショナルリサーチ」が１等賞を受賞した。西岡教授の20年以上に及ぶ研究の，基礎・臨床の両面からの成果や，難治の間質性肺疾患の新薬開発につながる独創性・創造性の高さが評価されての受賞となった。同賞を受賞したのは，四国の医療研究機関関係者では初めてである。贈呈式は2023年12月１日，東京都内のドイツ大使館で開催された。

西岡安彦教授ご略歴
1964年　徳島生まれ
1988年　徳島大学医学部医学科卒業
1996年　米国ピッツバーグ大学外科学・分子遺伝学・生化学部門研究員（～ 1998年）
2008年　米国 M.D. アンダーソンがんセンター癌生物学部門　客員准教授
2011年　徳島大学呼吸器・膠原病内科学分野教授
2019年　徳島大学病院副病院長（併任）
2022年　徳島大学医学部長（併任）

第60回日本ベーリンガーインゲルハイム「ベルツ賞」

１等賞「肺線維症に対する抗線維化薬開発：がんと線維化肺の接点を捉えたトランスレーショナルリサーチ」
徳島大学大学院医歯薬学研究部
呼吸器・膠原病内科学分野教授　西岡安彦

贈呈式であいさつする西岡安彦先生
徳島新聞より（2023年12月２日掲載）

２等賞「間質性肺疾患の病態解明を目指した臨床・基礎研究」
京都大学大学院医学研究科
呼吸器内科学教授　平井豊博
京都大学大学院医学研究科
呼吸不全先進医療講座特定准教授　半田知宏
京都大学 IPS 細胞研究所
臨床応用研究部門教授　後藤慎平

第60回選考委員会

専門委員
慶應義塾大学医学部　皮膚科学教授　天谷雅行
大阪大学医学部長　熊ノ郷淳
名古屋市立大学
呼吸器・免疫アレルギー内科学教授　新実彰男
大阪大学大学院医学系研究科
皮膚科学教授　藤本学

常任委員
京都大学名誉教授 井村裕夫
大阪大学名誉教授 岸本忠三
自治医科大学学長 宮内庁皇室医務主管 永井良三
京都大学名誉教授 中西重忠
東京大学卓越教授 理化学研究所理事 宮園浩平

第60回「ベルツ賞」１等賞を受賞して

徳島大学医学部長
呼吸器・膠原病内科学分野教授
西　岡　安　彦（医学部34期）

この度，第60回「ベルツ賞」１等賞を受賞いたしました。贈呈式は，令和５年12月１日に東京都港区のドイツ連邦共和国大使館にあるドイツ大使公邸（旧小泉策太郎邸）で在日ドイツ連邦共和国大使ご夫妻を始め，ベーリンガーインゲルハイム社のシニアアドバイザー，ディジーズマップのフローリアン・ガントナー氏，会長兼社長のヤンシュテファン・シェルド氏，選考委員会委員（常任委員，専門委員）の先生方など多数の参加者の下，開催されました。

「ベルツ賞」（正式名称：エルウィン・フォン・ベルツ賞）は，1964年にベーリンガーインゲルハイム社が日独両国の歴史的な医学領域での交流を回顧し，その交流関係を更に深めていく目的で，日本の近代医学の発展に大きな功績を残したドイツ人医師エルウィン・フォン・ベルツ博士の名を冠して設立した権威ある医学賞です。ベルツ博士は，明治９年から約30年近く東京大学医学部の前身である東京医学校で教鞭を執られ，数多くの優れた日本人医学者を育てると共に皇室の侍医を務められました。

「ベルツ賞」はノーベル賞のような他の医学賞とは異なり，毎回時宜に応じたテーマを設定してレビュー形式の研究論文を募集し，選考委員会により１等賞と２等賞が選考される医学賞です。記念となる第60回は「間質性肺疾患」をテーマに募集され，12編の論文の中から私の論文「肺線維症に対する抗線維化薬開発：がんと線維化肺の接点を捉えたトランスレーショナルリサーチ」（Development of antifibrotic drugs against pulmonary fibrosis: translational research focusing on the interface between cancer and fibrotic lungs）が１等賞に選ばれました。

応募論文は，私が22年間にわたって積み重ねてきました間質性肺炎に対する抗線維化薬開発研究をまとめ応募したものです。論文は，「医学のあゆみ」第288巻・第２号148～161ページ（2024年１月13日発行）に掲載されております。ぜひ一度ご覧いただけますと幸いです。審査員からの「評価ポイント」についてはホームページ上で以下のように発表されています。

贈呈式での記念写真

左から，駐日ドイツ連邦共和国大使 クレーメンス・フォン・ゲッツェご夫妻，西岡安彦夫婦，
ベーリンガーインゲルハイム社シニアアドバイザー ディジーズマップ フローリアン・ガントナー氏

・臨床と基礎の両面において非常に大きな成果をあげており，この双方向からの独創的アプローチによる新たな肺線維症治療薬の開発が期待される
・病態にかかわると考えられる新たな線維細胞集団（fibrocyte cluster）を見いだし，この線維細胞を標的とする新たな治療戦略を追求している
・線維化にかかわる因子としての血小板由来増殖因子（platelet-derived growth factor, PDGF）に注目し，ドラッグリポジショニングを行うとともに，新規化合物の発見にも成功し，臨床試験を推進している

呼吸器・膠原病内科学分野の間質性肺炎研究は，大学院生と共におこなった研究を基礎に，その後，企業・ベンチャーや他大学との共同研究へと大きく発展し，臨床試験も進んでいます。今後も徳島大学発の創薬を目指すと共に，さらに独創的な成果に繋がるよう引き続き真摯に研究に取り組んでいきたいと思っています。

改めまして，これまでの共同研究者に心より御礼を申し上げ，受賞の報告とさせていただきます。

贈呈されたメダルと賞状

西岡安彦教授のベルツ賞受賞を祝して

青藍会会長
荒　瀬　誠　治（医学部20期）

西岡安彦呼吸器・膠原病内科学分野教授が第60回「ベルツ賞」を受賞され，その贈呈式が令和５年12月１日，ドイツ大使館でドイツ大使らの参加の下に開催された。ベルツ賞は，ベーリンガーインゲルハイム社設立の医学賞であるが，これまで60年にわたる継続状況，受賞者の選考過程，受賞者の成果内容，同人間像，奨金額，等々の詳細が周知・認知され，今や医学者の間では日本を代表する栄誉ある賞となった。一本の論文評価というより，ある医学領域の難題に取り組み，風穴を開け続け，その結果がどうなったか？が評価される賞なのである。問題解決のため（詳細：医学のあゆみ第288巻第２号148～161），西岡先生とともに研究を続けた呼吸器・膠原病内科学分野の皆様は本当に胸を張ってください。あなた達は青藍会会員の宝であり誇りです。

その昔，女房の仕事（大学救急部・集中治療部）を通じて知り得た若き頃の西岡先生は，強烈な個性で突き進む先生ではなく，圧倒的に信頼度の高い臨床家で final diagnosis，prognosis を出される先生であったとの思いが強い。研究者魂があることも感じていたが，実は Nature をはじめ big journals を席巻し，重要な情報を世界の医療界に発信し続けた研究者であったことを実感できなかった。思えば，西岡先生は physician scientist として最高のロールモデルなわけで，このような先生を会員に持つことができた青藍会を誇りに思います。受賞の報を聞きどれだけ嬉しかったことか，私心を込めて西岡先生の快挙を心から芯からお祝いしたい。本当におめでとうございました。

徳島大学病院長香美祥二先生がアジア小児腎臓病学会名誉会員賞受賞

アジア小児腎臓病学（AsPNA）名誉会員賞を受賞して

徳島大学病院長
香　美　祥　二（医学部26期）

青藍会の皆様，徳島大学病院の運営ではいつも大変お世話になりありがとうございます。

さてこの度，アラブ首長国連邦のドバイで開催された第15回アジア小児腎臓病学会（AsPNA）学術集会（３年に一度開催）にて AsPNA アワード（honorable award）を受賞しましたのでご報告いたします。腎臓専門医の中でも小児科医でなければ AsPNA（Asian Pediatric Nephrology Association）と聞いてもピンとこないと思いますので，すこし当会を紹介します。AsPNA は世界の小児人口約25億人の６割を抱えるアジアにおける小児の腎臓病（CKD）診療に携わる医師の代表組織です。AsPNA には約40年の歴史があり，現在アジア27カ国が加盟しています。AsPNA の設立目的は，小児腎臓病分野の科学と技術を発展させ，その成果を CKD の子ども達に還元することです。アジアの小児人口の規模を考えると，アジアで CKD 診療の成果を出すことは，結果として世界規模で CKD 患児を救うことになりますので，AsPNA や国際小児腎臓病学会（IPNA）両者の活動上，プライオリティーの高いミッションです。また，本アワードは従来，各国の小児腎臓病学会の創設者や IPNA あるいは AsPNA の学会長（理事長），小児腎臓学で顕著な功績のある者が対象で，IPNA あるいは AsPNA の評議員推薦で選考に上がり選考委員会で決定されます。世界各国の会員の中から過去14名の方が受賞しています。私の場合は，腎局所レニン・アンジオテンシン系（RAS）由来のアンジオテンシン II が腎形成と小児 CKD の発症・進展に関わるという，成育サイクルにおける腎 RAS の役割解明研究と実臨床で RAS 阻害剤は妊婦には禁忌となる一方，小児 CKD 患児に対しては高血圧の有無を問わず第一選択薬として推奨されるまでになった学術貢献が評価されました。評議員 committee でメンバーと苦楽を共にしながら，学会プログラム企画やアジェンダ遂行で幾つかの足跡を残せたこともプラス評価になったのかな？と感じています。

総会で，アジア小児腎臓病学会，Bagga 会長（左）と握手を交わす香美病院長
中央の女性は IPNA 執行役員の Yap 教授

この度の受賞に関連した内容を Invited lecture: Role of non-classical renin-angiotensin system（non-RAS）axis in renal development and pediatric CKD で講演しました

ドバイまでの機上で講演データの修正を行いましたが，同時に私の研究の腎臓学上での意義の再確認やこれまで歩んできた道のりを振り返る良い機会となりました。AsPNA 総会において私の業績がアナウンスされ，会員の前で AsPNA 会長や IPNA 執行役員から温かい言葉と謝意をいただいたことは望外の喜びです。総会では，北米やヨーロッパからの invited speakers も含めて全員起立し，イスラエル軍のガザ地区侵攻に対する非難とパレスチナの子どもの犠牲者への黙祷に参加するという中東開催の学会ならではの経験もしました。現在の複雑な国際情勢をひしひしと肌で感じた次第です。

本受賞は長年の教員 / 研究医生活を支えていただいた小児科教室 / 同門会や青藍会，大学職員の皆様のご支援があったからこそです。この場をおかりして皆様に厚く御礼を申し上げます。

青藍会の助成活動

青藍会スポーツ奨励賞の授与

青藍会スポーツ奨励賞は，医学科学生に対して積極的に支援し，青藍会に対する認識を深めてもらうため，全日本医科学生体育大会及び西日本医科学生総合体育大会などにおいて優勝，準優勝した団体及び個人に授与することとし，令和２年５月15日開催の役員会にて承認されました。コロナ禍のため体育大会の中止が続いておりましたが，４年ぶりに開催され，今回初めて当該学生に授与しました。

青藍会スポーツ奨励賞を受賞して

弓道部（全医体団体優勝　西医体団体準優勝）

主将　平　野　和　樹（医学科４年）

この度はこのような賞をいただきましてありがとうございます。全医体での優勝という貴重な体験をさせていただいたのも青藍会の皆様をはじめとする多くの方々に支えていただいているからであります。改めてお礼申し上げます。

ゴルフ部（西医体団体優勝）

主将　大工廻　　亮（医学科４年）

この度は輝かしい賞を頂き，大変光栄に思います。このように表彰いただけることは部員一同，日々の練習のモチベーションになっています。今後も学業と両立しながらさらなる部の発展に部員一同努力して参ります。ありがとうございました。

ゴルフ部（西医体個人優勝）

森　田　彩　夏（医学科２年）

この度は，このような名誉ある賞を受賞することができ，大変うれしく思っております。 大学に入り，ゴルフ部として活動することは徳島大学に来た意味でもありました。これからも精進し，皆様の温かい応援を頂ければ幸いです。本当にありがとうございました。

水泳部（西医体女子50m背泳ぎ第１位）

三　久　翠　子（医学科１年）

この度は奨励賞を頂きまして誠にありがとうございます。西医体の結果は環境を整えて下さっている方々と，共に練習に励んだ仲間のおかげだと心から感謝しております。来年も西医体で良い結果を残せるように頑張りたいと思います。

水泳部（西医体男子100m平泳ぎ第２位）

富　岡　　優（医学科２年）

日々の練習の成果が結果として表れ，今回このような栄えある賞を頂くことができ，大変光栄に思います。次の西医体で優勝するために今までよりも強度・質共に高いトレーニングを積み，日々精進していきたいと思います。

青藍会奨励賞の授与（2023年度医学科３年次医学研究実習発表会優秀者表彰）

2023年度医学科３年次医学研究実習発表会優秀者９名に青藍会奨励賞を授与しました。

青藍会奨励賞を受賞して

浦　川　佳帆織

この度は青藍会奨励賞をいただき，誠にありがとうございます。研究実習を通して培った，日々継続する力とプレゼンテーション力を活かして，日本の医療に貢献できる医師になれるよう勉学に励んでまいります。

加　藤　胡都菜

この度は青藍会奨励賞という栄えある賞を頂きありがとうございます。研究室の先生方には丁寧なご指導を頂いたことをこの場をお借りして感謝申し上げます。今後もこの賞に恥じないように努力していきたいと思います。

齋　藤　瑛美里

この度は青藍会奨励賞の受賞者に選んでいただき誠にありがとうございます。

医学研究実習に関わってくださった全ての方々への感謝を忘れず，この経験を人生の糧とし，今後もより一層自己研鑽に努めてまいります。

今　川　悠倫子

この度は，青藍会奨励賞に選出していただきありがとうございました。研究実習にあたり，ご指導くださった細胞生物学分野の先生方，特に米村教授には大変お世話になりました。この場をお借りして感謝申し上げます。今後も研究活動での経験を活かし，成長できるよう努力して参りたいと思います。

明　野　凌　雅

この度は青藍会奨励賞に選出していただき，誠に光栄に思います。最先端の医学研究に触れることで，私自身大きく成長することができました。木戸先生をはじめとする生体防御病態代謝研究分野の先生方に心より感謝申し上げます。立派な医師になるために，この経験を活かして日々精進して参ります。

小　林　雄　一

賞を賜り光栄です。私は土曜日や夏休みもエピジェネティクス研究に打ち込みましたが，思うような実験結果が出ず，研究の厳しさを実感しました。この経験を糧に，これからも精進していきます。池田先生，船本先生に御礼申し上げます。

徳島大学病院卒後臨床研修センターの活動報告

前徳島大学病院卒後臨床研修センター長
岩　田　　貴（医学部36期）

青藍会の皆様方には，日頃多くの研修医の受け入れやご指導いただき，また徳島大学病院卒後臨床研修センターにご支援を賜り，敬意と共にお礼を申し上げます。現在多くの研修医が県内外の研修病院や地域の診療所など複数の施設で研修経験を積む，『襷掛け研修』の特徴を生かした研修をさせていただいております。このプログラムにおいて急な研修先，診療科の変更に対しても，受け入れ先の確保や調整に当センター教員やスタッフとともにご尽力いただき，全ての研修医の研修が滞りなく進められていることに大変感謝をしております。また，院内研修では初期研修から専門研修につながる基礎知識を得るための教育講座やセミナーの開催を，少人数の講習にもかかわらずご準備から実施まで大変丁寧に行っていただき，感謝申し上げます。

本年も新型コロナウイルスはじめ様々な感染症が人流の増加とともに拡大傾向にありますが，十分な感染対策を取りながら，初期研修医獲得のための宣伝活動として，本学の徳島県出身者のみならず，特に県外出身者や学外の学生にもしっかりとアピールし初期研修医を獲得することを目的に，これまでコロナ禍で中止していた「合同プログラム説明会」を３月２日に開催いたしました。これは，徳島県下の基幹型臨床研修病院が集結して，県内外の学生を対象に，対面とオンライン併用で直接話をしながら初期臨床研修プログラムの説明を行い，徳島県での研修医から始まる将来像を描いてもらう説明会です。

このように研修医中心の多方面からの手厚い研修サポートを皆様のご協力で行っていることに対して，研修プログラムの評価や研修状況の評価を行い，プログラム改善，質のよい医師の養成に寄与することを目的に第三者評価として，卒後臨床研修評価機構（JCEP）の評価を本年１月31日に受審しました。このJCEPによる第三者評価は数年のうちにすべての臨床研修病院に対して必須予定の評価で，国立大学病院では全国で９番目と非常に早い段階での受審となりました。研修理念・基本方針から始まり病院組織，研修の連携・指導体制，研修規程，評価方法，環境に至るまで様々な項目の書面調査では各部局の皆様に必要書類の作成にご尽力いただき，誠にありがとうございました。さらに当日の訪問調査でも各診療科の指導医，指導者の皆様，研修先の病棟や各部局の皆様へのインタビューにご協力いただき，誠にありがとうございました。おかげさまで無事に受審を終えることができました。最後の講評では本院のすべての部局が協力して研修医を育てていることが高く評価されるとともに，さらにより質の高い臨床研修に必要なご指摘もいただきました。今後とも皆様のお力をお借りしながら研修医にとって最善の研修ができるように取り組んで参ります。

徳島大学病院の研修プログラムは，本来各協力病院や診療所，施設との連携を密にし，研修医のひとりひとりの要望に答える形で，各病院の特徴を活かした融合研修を進めていました。このような連携研修を通し，徳島県全体で医師を育てる，“All 徳島”での研修環境を構築し，徳島県の若手医師育成と医療の質の向上に寄与するのが本来の目標ですので，研修医の育成について，もう一度原点に返り，皆様方と一緒に柔軟に取り組みたいと考えております。

今後とも皆様方には卒後研修に対しご理解と共にご指導・ご支援を賜りますよう，何卒宜しくお願い申し上げます。

令和５年度臨床研修病院第三者（JCEP）評価
（令和６年１月31日，徳島大学病院日亜ホールwhite）

青藍会賞募集

2024年度青藍会賞募集

2024年度青藍会賞を下記のとおり募集します。

本賞は青藍会会員による学術研究の発展と奨励のために，若手研究者の優れた業績に対して授与するものです。奮ってご応募下さい。

1．応　募　資　格

2024年12月末現在で42才未満の青藍会正会員

但し，2024年度までの会費完納入者であること。

2．審　査　対　象

2020年１月から2024年12月までの研究業績を対象とします。

なお，選考では徳島大学で主として行われた研究であることを重視します。

3．応　募　締　切

2025年１月14日（火）（応募締切り後は提出書類の変更を認めません）

4．応　募　手　続

以下の書類を青藍会事務局へ提出して下さい。（**原本とそのコピー10部をご用意下さい**）

1．申請書（別紙様式１）
2．履歴書（略歴）（別紙様式２）
3．主指導者の推薦状（別紙様式３）
4．原著論文（**2020年１月～2024年12月末に発刊された原著論文**；通し番号をつけ，年代の近い順に記載し，主たる論文３編には通し番号に〇をつけること。主たる論文は筆頭著者の論文に限定しない。応募者には下線をひくこと。）（別紙様式４）
5．主たる論文３編の要旨；申請者が論文の研究においてどこに寄与したかの記載を含めること。（各400字程度）（別紙様式５）
6．主たる論文３編の別刷り（コピー可）
7．競争的資金の獲得状況（**2017年１月～2024年12月末**までに獲得した研究費の名称，研究期間，研究題目，直接経費の研究費総額。研究代表者の資金に限る。）（2024年12月末時点で採択が決定したものも含む）（別紙様式６）
8．今後の研究の展望（800字程度）（別紙様式７）

なお，同一推薦人が複数者を推薦する場合は推薦順位をつけること。

申請書等の各様式は青藍会事務局（seiran@tokushima-u.ac.jp）にご請求下さい。

5．選　　考

青藍会会長から委嘱された選考委員会が行います。

6．受　賞　者　数

原則一名

7．青藍会賞の授与

賞状及び研究助成金100万円の目録を青藍会総会開催日に授与します。

研究助成金は受賞者あてで教室への委任経理金（奨学寄附金）とする。

8．受　賞　講　演

青藍会総会開催日当日，受賞講演を行っていただきます。（30分程度）

お問合せ先　青藍会事務局　TEL 088-633-7109（内線2601）
seiran@tokushima-u.ac.jp

新 入 生 歓 迎 会

日時：令和６年４月５日（金）12：50 ～ 13：28
場所：基礎第一講義室

眉山の桜も満開に咲き誇る中，青藍会主催の新入生歓迎会が開催された。新入生112名（男子74名女子38名）は，アスティとくしまで挙行された令和６年度徳島大学入学式の後，蔵本キャンパスに移動し，晴れやかな表情で会場に到着した。小西竹生事務長の司会のもと，青藍会会長荒瀬誠治先生の祝辞に続き，大藤純先生，松井尚子先生より先輩からの歓迎のことばが述べられた。会は終始和やかな中，盛会裡のうちに終了した。

令和６年度新入生への祝辞

今年の新入生歓迎会（青藍会主催）

青藍会会長
荒　瀬　誠　治（医学部20期）

令和６年４月５日（金）午前10時よりの大学入学式がアスティとくしまで行われた後，医学科新入生は貸し切りバスで蔵本キャンパスに移動した。目的は１）青藍会主催の新入生歓迎会と，２）医学科オリエンテーションである。新入生らは歓迎会の為にざわざわと基礎第一講義室に参集してくれたが，その教室（講堂）で医学教育が行われているのを知らされ，また廊下を挟んだ向かい側の解剖実習室のたたずまいを認めると共に，少しざわつき感が消えた。まっさらな新入生の心が大学医学教育の一部を実感したわけで，私達は，歓迎会を基礎第一講義室でして良かったと感じた。ゲストを含め皆で弁当を食べながらの歓迎会になったが，３人の歓迎の言葉にほぼ全員が白けた顔をせず，きっちりこちらに顔を向けてくれたのは，驚きだった。

私は，彼らの期待感，わくわく感にきっちり応えたいと思い，使い古した言葉に満ちた原稿をしまい，会員7000人を超える青藍会とは何かについて思いの丈を語った。そして，徳島という街に魅力が失せつつある今，せめて大学の医学部だけでも魅力的な部所になってほしい，できれば若者の力で魅力のある医学部にしてほしいと述べ，青藍会は医学部（学生を含む）が魅力的になるために必要なサポートを徹底的することを約束した。学生を青藍会正会員として迎え１年が経ち，青藍会は学生との関係をどう築くかに悩んできた私達の一つの答えのように思う。

その後，救急集中治療医学の大藤純教授（43期），臨床神経科学の松井尚子准教授（45期）の２人から，建前の文章を取っ払ったストレートで圧倒的に魅力的で，新入生らの心に刺さるような，楽しさと笑いに満ちた歓迎の言葉をいただいた。言葉の力は，それを発する人間の佇まいとあいまって強いし，若者

は聴く力を失ってはいない。コロナ下でも彼らは目標を決め，しっかりと自分自身で，また仲間達，先生方と共に勉強をしてきたのだろう。変な心配は杞憂だった。僕は，このような青藍会の先輩が君らを待ってるよ！と付け加え，「落第だけはせず早く上がってきなさいよ」と言い放って歓迎会を終えた。スマホをいじる若者は居ず，叙事的ではなく叙情的な新入生歓迎会となった。

新入生歓迎のご挨拶

徳島大学大学院医歯薬学研究部
救急集中治療医学分野教授
大　藤　　純（医学部43期）

新入生の皆さん，徳島大学医学部医学科へご入学本当におめでとうございます。皆さんにとって，すばらしい門出の日に，ご挨拶させて頂ける機会を青藍会会長の荒瀬先生より頂きましたこと，心より感謝申し上げます。

私は，1991年に徳島大学医学部医学科に入学しました。学生時代は，軟式テニス部に所属しました。体育会系クラブで練習も大変でしたが，おかげで生活は規則正しくなり，テニスの技術と共に体力や気持ちの強さが身につき，同期や先輩・後輩との繋がりも出来ました。医学部の進級試験では，いつも友達と勉強し，本試験で合格するようにしていました。医学部の勉強は，６年以上かけて取り組むものではなく，早く医師として社会に貢献することが大切です。本日一緒に入学した皆さんは，卒業も一緒にできるよう頑張りましょう。

医学部卒業後は，麻酔科医としてキャリアをスタートしました。最初の２年間は，高松赤十字病院で勤務しました。早く仕事を覚えようと，毎朝７時前には出勤して麻酔科（ペイン）外来の準備をし，途中で手術室に移動し，夜遅くまで麻酔業務に携わりました。仕事が終わるのはいつも夜10時か11時頃，日付が変わることもありましたが，その日に経験した麻酔担当症例は必ず日記に書いていたことは，今では懐かしい思い出です。

３年目から６年目までは，静岡県にある聖隷浜松病院で勤務しました。年間5,000件を超える麻酔管理症例を麻酔科医３～４名で担当し，とても厳しい環境でした。２年ほど麻酔科医として勤務した後に，“手術室以外でも活躍する麻酔科医を目指せ”，と上司から助言頂き，救急外来も経験しました。救急医は２人でしたが，月に300台を超える救急搬送の受け入れと重症患者の主治医も務めていました。多くの時間を病院内で過ごしましたが，手術室以外の医療を経験できる貴重な機会でした。

その後は徳島大学病院に戻りました。手術室で麻酔科医として勤務し，大学院にも進学すると思っていましたが，当時の麻酔科の教授から，“急性期医療のエキスパートを養成したい”，と言われ，集中治療室（ICU）へ配属になりました。ICU は，病院内で最も重症な患者を24時間絶え間なく治療するところです。全身臓器の細部にわたる知識と経験に加え，人工呼吸器や体外循環装置などの高度な医療機器にも精通する必要があり，新たに勉強することは多かったです。また，大学病院では，研究成果も求められます。私は，気道管理や人工呼吸管理に興味がありました。月に６回以上の ICU 当直を行いつつ，空き時間を利用して研究データのまとめや論文執筆などをしていました。８年ほど勤務した頃には，救急・集中治療専門医と医学博士を取得し，米国のボストンにあるマサチューセッツ総合病院へ研究留学しました。異国での研究や家族を連れての異文化での生活は，苦労も多かったですが，とても刺激的で，何物にも代え難い良い思い出となりました。

帰国後は，徳島大学病院の ICU で勤務する傍ら，災害医療に取り組むことになりました。DMAT 隊員の資格を取り，病院の災害対策室長として主に南海トラフ地震対策の整備などを行いました。2020年からは，救急集中治療医学分野の教授に就任しましたが，新たな教室運用を始める矢先に，新型コロナウイルスの世界的蔓延により，大きく生活が変わりました。徳島大学病院は，県内の重症患者を受け入れる唯一の医療機関となり，致死的な呼吸不全を呈した患者が多く搬送されてきました。まさに国難で

あり，ある意味災害とも呼べる状況でした。連日，防護服を着ての厳しい診療を強いられましたが，多くの人からの支援により，乗り越えることができました。

これまでの人生を振り返りますと，麻酔，救急，集中治療，災害医療と縁があり，その都度必要なことを学んできました。私にとって運が良かったのは，その時々に出会った上司の先生が的確な助言を下さり，常に新しい世界への挑戦を促してくれたことです。私は，あまり難しく考えず環境の変化を受け入れ，それぞれの職場で求められるものを習得し，信頼を得ることに懸命に努力してきました。医師としてのキャリアは約40年と長く，学生時代には想像もしていなかった変化や困難と遭遇するかもしれませんが，様々な変化や課題を柔軟に受け入れ，必要に応じて努力できる素直さは，皆さんも大切にしてほしいと思います。

最後になりますが，皆さんは本日より，徳島大学医学部の青藍会に所属します。同じ出身校の絆，青藍会の絆は，大変貴重で心強いものとなります。皆さんも困ったときや力を貸してほしいときなどは，遠慮なく相談頂ければと思います。

本日は，本当におめでとうございました。

新入生歓迎挨拶

徳島大学大学院医歯薬学研究部
臨床神経科学分野准教授
松　井　尚　子（医学部45期）

新入生の皆さん，徳島大学医学部医学科へのご入学，誠におめでとうございます。

私は1993年の春に，徳島大学に入学しました。毎年この時期になると，入学当時，一人暮らしに備えるために母親と一緒に大学の生協で買い物をしたり，同じ高校出身の同級生とお花見に出かけたりしたことを思い出します。

卒業後は，1999年に徳島大学の旧第一内科に入局し，内科医としてのキャリアをスタートさせました。大学で研修をし，徳島県内の阿波病院，その後，高松市民病院に赴任しました。医局の再編後に，徳島大学に戻ってきてからは，脳神経内科医として，20年近く働いております。

脳神経内科というとイメージがわかない方も多いかと思います。

内科の中には消化器内科，呼吸器内科，循環器内科といった専門分野があります。脳神経内科も内科の中の一つの専門分野です。患者さんを診察して，脳や脊髄のどのあたりが悪いのか異常を見つけることを得意としている分野でもあります。最近では「レカネマブ」という新しいアルツハイマー病の薬の名前を聞いたことがあるかもしれませんが，認知症も扱っています。また，私自身は免疫に関係した疾患を専門にしており，多発性硬化症や重症筋無力症といった患者さんを多くみています。４年生になると，こういった疾患の系統別講義が始まります。また，それより低学年の３年生では，研究室配属といって，約半年間，臨床系の教室や基礎系の教室に半年間配属されて，何らかのテーマに対して，研究を行って成果発表をするというプログラムがあります。定期的に学生さんを受け入れていますので，３年生，４年生になった時に，今この場にいる学生さんとも関わりが出てくるかもしれません。

これまでの経験を踏まえて，皆さんに２点ほどお伝えしたいと思います。

すでに，何科のお医者さんになろうと決めている学生さんもいれば，高学年になるにつれ進路のことで悩む学生さんも出てくるかと思います。皆さんは，医学部を卒業後，医師国家試験により医師免許を取

得し，医師の道を歩まれていくことになります。卒業して10年くらい経ってくると，大学で仕事をする人もいれば，医療機関で勤務する人も，開業する人もいます。また，最近は厚生労働省の班研究の仕事で全国調査をする機会があったのですが，特に都会で住まわれている方だと，専門医の資格を取得後，企業や研究所で勤務している方も見受けられます。医師のキャリア，働き方は様々です。ただ，どのような内容の仕事であれ，社会や医療に貢献するという意味においては，重要な役割を担っているということを忘れないでいてほしいと思います。

もう一つは同級生とのつながりをぜひ大切にしてください。

少し前にアルバムの整理をしていたところ，同級生とスキーに出かけたり，体育館でバスケットボールをしたりしている時の写真が出てきました。当時の同級生に誘ってもらっていなかったら，一生スキーをしたことがない人間になっていただろうなと思いました。今の学生さんは，私が大学時代よりも，格段に学ぶことは増えて，高学年で行っていた病院実習もだんだんと前倒しにされる傾向にあります。さらに，お医者さんになると，自分のしたいことをする時間があまり取れなくなります。

大学時代にしかできないこと，部活でも，バイトでも，旅行でも，ホームステイでも，ぜひ何でも挑戦してみてください。

それでは，健康に留意して，充実した学生生活となることを祈念しております。

本日は，本当におめでとうございました。

書籍紹介

このコーナーでは，正会員，名誉会員及び学内関係者の著書を紹介することとしています。専門家向けの書籍および一般向けの書籍を紹介していきたいと考えています。自薦，他薦どちらでも結構です。青藍会事務局までお送り下さい。なお，掲載については広報委員会にご一任下さい。

「おとな女子の漢方」

（発行元　東洋学術出版社　2023年６月30日発行）

著者　高　橋　浩　子（医学部34期　ひろこ漢方内科クリニック）

橋　本　一　郎（医学部34期）

著者の高橋浩子先生は私と同期の医学部34期であり，徳島県内で広くご活躍であるためご存じの方も多いと思われる。旧第三内科に入局後に関連病院での内科医勤務を経て，現在はひろこ漢方内科クリニック院長であり，総合内科専門医，漢方専門医・指導医の肩書を持つ。本書籍は「50歳からのつらい症状にはこれしかない！」に続く高橋浩子先生の漢方に関する書籍の第２弾となる。前書が対象とした読者は一般の方や患者であったが，今回の「おとな女子の漢方」は漢方を学ぶ医師や薬剤師に向けた本格的な医学書である。本書では漢方学的解説が丁寧に記載されているうえに，症例報告のような形式で実際の効果や効用が具体的に理解できるように構成されており，臨床医が「患者のために」上手に漢方を使うことに重点が置かれている。

書籍のはじめには漢方医学の考え方が記述されていて，その考え方は医学部で学習する西洋医学とはまったく異なることがわかる。人体や疾患を森に例えると，西洋医学が森の一つ一つの木，その枝，その葉を見ているのに対して，漢方医学は風の流れや揺らぎ，大地に含まれる水の動きなどを通して森全体を俯瞰しているようである。続いて，漢方薬の剤型の解説があり，漢方薬を構成する生薬が丁寧に説明されている。本書では剤型には振り仮名が，生薬には読み方が示されていて，漢方初学者でも読みやすい。さらにすべての生薬の備考欄にはそれぞれの生薬の特徴や由緒・来歴などに関する一言が添えられていて，教科書的で難解で無味乾燥になりやすい生薬の一覧表に親しみやすさが与えられている。そこには読者が諦めず，くじけずについて来られるようにとの筆者の思いやりや一つ一つの生薬を愛する気持ちが感じられる。

複数の生薬を組み合わせて，一つのグループとしたものは方剤と呼ばれる。医療用エキス顆粒（例えば葛根湯など）が一般的な臨床の場面ではお馴染みである。本書の第４章から最後の第11章までは，さまざまな症状に適切な漢方薬（方剤）が記載されている。ここでの「症状」は疲れ・冷え・のぼせなどのように，非常にざっくりと大きくまとめられている。その症状を引き起こす病態が漢方医学的に解説されて，有効な生薬と結び付けられている。各病態に用いられる漢方薬（方剤）が詳細に解説されるが，臨床医にとって最も参考になるのがそれぞれの漢方薬を用いた患者の症例報告である。この症例報告は全ての漢方薬（方剤）ごとに記載されていて，具体的な漢方薬の使用方法が理解できるが，各エピソードには筆者の温かい人柄が滲み出ている。筆者は患者の背景となる生活環境やバックグラウンドを把握しており，それらに症状との関連性を見出し，患者全体として漢方薬で治療している。まさに森全体を俯瞰して治療しているように感じられる。本書は，患者を単に治療するのではなく患者を幸せにしたいとの筆者の思いが滲み出る書籍であり，読んでみると漢方薬の解説本であるのに高橋浩子先生の元気やパワーをもらったように感じる。漢方に興味を持つ医師にはぜひ一度手に取っていただきたい。

徳島大学の動き

徳島大学大学院医歯薬学研究部新任教授紹介

徳島大学大学院医歯薬学研究部
泌尿器科学分野教授
古　川　順　也（ふるかわ　じゅんや）
昭和50年10月１日生

略　　歴

平成12年３月	神戸大学医学部卒業
平成12年４月	神戸大学病院研修医
平成13年４月	神鋼病院泌尿器科医員
平成15年４月	神戸大学大学院医学研究科入学
平成18年９月	神戸大学大学院医学研究科卒業 博士号取得
平成19年８月	The University of British Columbia, Vancouver Prostate Centre 研究員
平成22年４月	神戸大学大学院医学研究科 腎泌尿器科学分野 助教
平成28年４月	神戸大学大学院医学研究科 腎泌尿器科学分野 講師
令和３年10月	神戸大学大学院医学研究科 腎泌尿器科学分野 特命准教授
令和５年11月	徳島大学大学院医歯薬学研究部 泌尿器科学分野 教授 （現在に至る）

就任のご挨拶

徳島大学大学院医歯薬学研究部泌尿器科学分野
教授　古　川　順　也

この度，初代教授黒川一男先生，二代目教授香川 征先生，そして三代目教授金山博臣先生の後を継ぎ，令和５年11月１日付けで大学院医歯薬学研究部泌尿器科学分野の四代目教授に着任いたしました古川順也と申します。青藍会の皆様には，改めまして心よりのご挨拶を申し上げます。

私は平成12年に神戸大学医学部を卒業後は神戸大学泌尿器科に入局し，大学病院および市中病院の研修を経て大学院に進学いたしました。大学院では，膀胱癌に対する新規サイトカインを用いた免疫治療に関する研究で学位を取得し，さらに海外留学時には前立腺癌に対する新規標的治療に関する研究に従事いたしました。帰国後は泌尿器腫瘍学を専門分野とし，薬物治療やロボット支援手術を中心とした低侵襲治療に携わって参りました。これらの研究や臨床実績から得た知見をもとに，患者様に最先端かつ個別化された医療を提供することに情熱を傾け，日々精進して参ります。また，未来の泌尿器科医療を支える人間性豊かな医師の育成を目標とし，先進的な医療技術の提供と心のこもった診療に努め，徳島県の泌尿器科医療の拠点として地域医療への貢献に尽力してまいります。青藍会の皆様におかれましては今後とも引き続き，ご支援とご指導を賜りますようお願い申し上げます。

徳島大学大学院医歯薬学研究部
顕微解剖学分野
寺　井　健　太（てらい　けんた）
昭和52年10月29日生

略　　歴

平成14年３月	北海道大学医学部医学科卒
平成18年３月	大阪大学大学院医学系研究科分子病態医学専攻博士課程修了
平成18年４月	京都大学医学研究科病態生物医学博士研究員
平成18年６月	バージニア大学生化学分子遺伝学分野 Research Associate
平成23年５月	国立循環器病センター研究所細胞生物学部博士研究員
平成24年２月	東京大学分子細胞生物学研究所分子機能形態分野特任助教
平成28年４月	京都大学大学院医学研究科時空間情報イメージング拠点特定准教授
平成28年10月	京都大学大学院生命科学研究科生体制御学分野准教授
令和３年２月	京都大学大学院医学研究科病態生物医学分野准教授
令和５年12月	徳島大学大学院医歯薬学研究部顕微解剖学分野教授 （現在に至る）

就任のご挨拶

徳島大学大学院医歯薬学研究部顕微解剖学分野
教授　寺　井　健　太

令和５年12月１日付けで顕微解剖学分野の教授を拝命いたしました。私は，北海道大学医学部を卒業後に，大阪大学，米国バージニア大学，国立循環器病センタ，東京大学，京都大学と研究・教育に従事してまいりました。この間，新しい観察方法を開発して生命科学を解き明かすことを行ってまいりました。観察方法の提案については皆様のお役に立てるのではないかと考えております。

これからの組織学は二次元の世界から，三次元に変わりつつあります。更には時間軸も付与された四次元の組織学・病理学情報も多く出てきております。これらに加え，機械学習の台頭や遺伝情報などが付随するようになってきました。徳島大学の学生には，従来の組織学はもちろんのこと，これらの変化に対応できるような素地を付けて頂けるように尽力する所存です。

青藍会の先生方におかれましては，今後ともご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

徳島大学病院新任教授紹介

徳島大学病院安全管理部教授
池　本　哲　也（いけもと　てつや）
昭和46年６月16日生

略　　歴

平成10年３月	徳島大学医学部医学科卒業
平成10年６月	徳島大学医学部附属病院（旧第一外科研修医）
	徳島大学社会人大学院 医学研究科 外科系専攻 入学
平成11年４月	愛媛県立中央病院（外科研修医）
平成12年４月	兵庫県立淡路病院（外科医員）
平成13年８月	徳島県立三好病院（外科医師）
平成15年３月	徳島大学大学院医学研究科博士課程修了
平成15年８月	徳島大学医学部附属病院 第一外科 医員
平成18年11月	徳島大学病院 消化器・移植外科 診療助手
平成19年８月	University of Alberta, Edmonton（AB, Canada）, Post doctoral fellow
平成19年12月	Baylor Medical University, Dallas（TX, USA）, Senior fellow
平成21年４月	徳島大学大学院 ヘルスバイオサイエンス研究部消化器・移植外科学 助教
平成24年５月	徳島大学大学院 ヘルスバイオサイエンス研究部消化器・移植外科学 大学院併任講師
平成28年７月	徳島大学病院 消化器・移植外科 講師
平成28年10月	徳島大学病院 安全管理部 特任准教授
令和２年11月	徳島大学病院 安全管理部 特任教授
令和３年４月	徳島大学病院 安全管理部 部長
令和５年12月	徳島大学病院 安全管理部 教授
	（現在に至る）

就任のご挨拶

徳島大学大学病院安全管理部
教授　池　本　哲　也（医学部44期）

令和５年12月１日付けで徳島大学病院 安全管理部の教授を拝命いたしました。

私は平成10年に本学卒業後，旧第一外科に入局し，愛媛県立中央病院，兵庫県立淡路病院，徳島県立三好病院などで外科を研鑽し，学位取得後カナダおよびアメリカへと留学し膵島移植を学んで帰学致しました。その後は肝胆膵外科を専門として消化器・移植外科・島田光生教授の下で診療・研究・教育に邁進して参りましたが，医療安全管理上の課題を外科医として日々痛感しておりました。徳島大学病院・加藤真介前安全管理部長とのご縁から，平成28年より安全管理部のメンバーに加えて頂き，令和３年４月からは徳島大学病院・安全管理部長も拝命致しました。医療安全管理は医療の質の第一の側面と考えられており，大きな課題を多数抱えております。今後，徳島大学で培ってきた臨床医としての感覚や研究医としての視点から，徳島大学および日本の医療・研究に資するよう全力で取り組んで参りますので，変わらずご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

末筆ではございますが，青藍会の益々のご発展をお祈り申し上げ，就任のご挨拶とさせていただきます。

徳島大学大学院医学研究科 MD-PhD コース修了

3年間を振り返って

宮　田　晃　志（医学科５年）

私は，MD-PhD コース生として臨床薬理学分野の石澤啓介教授の下，３年間大学院で研究活動に従事してきた。振り返ると３年間という期間は驚くほど早く過ぎていった。本稿では，その３年間を振り返り，研究の意義と研究を通じて得た経験について記載したい。

私が大学院に入学した2021年は，既に日本でCOVID-19が流行していた。COVID-19の流行により様々な日常生活に制限がかかっていたことは記憶に新しく，徳島大学でも医学臨床実習を含め多くの学生活動が制限されていた。一方，すぐにCOVID-19に対する研究が世界中で始まり，COVID-19の存在が確認された後１年ほどでワクチンが開発され，臨床現場に普及していった。COVID-19に関する論文は現在までに４万報を超え，少しずつだが病態・特徴が解明されてきている。COVID-19感染症の流行は研究の重要性を再認識させられた出来事である。COVID-19に限らず，今日の医療の発展はこれまでの先達による研究の上で成り立っている。いわゆる，「巨人の肩の上に立つ」である。このことは大学院生活を通じてより強く実感した。クリニカルクエスチョンを解決するためには，基礎医学による検討や臨床応用のための臨床試験が必要となり，医療の進展において研究は不可欠である。大学院での研究活動を経て基礎研究の必要性や研究の意義などを実感できたことは，今後医療に携わる上で重要な機会であった。

私が所属してきた臨床薬理学分野は，薬剤と有害事象を主な研究テーマとした研究室であり，抗がん剤や抗菌薬に起因する自己免疫疾患や心血管疾患，腎疾患など幅広い有害事象を取り扱っている。一つの研究室で多彩な研究を行っており，研究室セミナーを通して循環器，神経系，腎臓など幅広い分野の知見を得ることができたのは当研究室ならではと考える。また，臨床薬理学分野には薬剤師や薬学部生が多く所属しており，薬剤と有害事象の研究を行う上で薬剤のプロの視点からアドバイスを得ることができたことも大変貴重な機会であった。実臨床での薬剤の使われ方の差異や臨床での課題など，臨床経験のない身ではなかなか知りえないことを，薬剤師の先生方からご助言いただくことで自身の研究の臨床的意義を実感することにも繋がった。

加えて，MD-PhD コースに入る前の自分と比較すると，文献検索能力，計画力，論理的思考力，文章作成力，プレゼン能力といった研究力はこの３年間で飛躍的に成長したと実感している。医療に限らず，今後の自分の人生にとっても大きな財産を得ることができた。もちろん，このような成長は研究からしか得られないわけではないが，先述した医療における研究の重要性から考えても，大学院への進学を迷っている方々には研究に目を向け，それを経験することを推奨したい。己の未熟を実感することも多いが，大学院３年間で学んだことを今後の医学部生活，ひいては医師としての糧にして，医療に貢献したいと思う。

末筆ながら，終始熱心なご指導ご鞭撻を賜りました石澤啓介先生をはじめとする諸先生方に，この場をお借りして厚く御礼申し上げたい。

国際学会参加時の写真

徳島大学 MD-PhD コース同窓会報告

徳島大学 MD-PhD コース魅力発信セミナー / 第 9 回近況報告会開催のご報告

荻　野　広　和（医学部56期）

医学部56期，MD-PhD コース３期生で現在徳島大学病院 呼吸器・膠原病内科の荻野広和と申します。青藍会の皆様方には平素より本コースの発展のためご支援いただいておりますこと心より御礼申し上げます。さて本年も３月16日（土）に徳島大学 MD-PhD コース魅力発信セミナー / 第９回近況報告会を開催致しましたのでご報告申し上げます。

昨年度は開催を見送った魅力発信セミナーですが，本年度は無事開催することができました。Teams を用いたオンライン形式とし，MD-PhD コース同窓生・現役生９名の他，医学部教員，学部学生，大学院生含め計21名の参加者を得ました。

冒頭で荻野より，本学における MD-PhD コースの現況を説明しました。この中で，現在19名の同窓生（うち現役生２名）がいること，令和６年度より新たに２名の進学者が加わることを報告しました。加えて５年前より導入された総合型選抜「四国定着研究医型」で入学した第１期生１名が本年度（令和５年度）より，２期生１名が来年度より本コースへ進学することを報告しました。

続いて特別講演としてお二人の方からご発表をいただきました。特別講演１では MD-PhD コース３年生の宮田晃志君に「私の MD-PhD コース３年間」というタイトルのもとご講演をお願いしました。残念ながら宮田君は体調不良のため欠席となり，急遽指導教員でもある MD-PhD コース１期生の石澤有紀先生が代役で発表されました。ご本人不在ではありましたが，３年間の経験や苦労談のほか，進学を経て感じる本コースの意義など，宮田君の想いがたくさん詰まった素晴らしい発表でした。続いて特別講演２では，呼吸器・膠原病内科から現在ロサンゼルスにある Cedars Sinai Medical Center へ留学中の小山壱也先生にご講演をいただきました。小山先生からは「研究を始めて海外留学に至るまで」というタイトルのもと，一臨床医が基礎研究に興味を持ち，様々な困難にぶつかりながらも素晴らしい仲間の協力を得ながら海外留学のチャンスを得るまでのプロセスについてお話しいただきました。常に強い志を持ち続けられている小山先生ならではの，熱く，聞く人の心に響く講演でした。最後に同窓生一人一人より近況報告をしていただき閉会としました。

現在医学部内に，研究の意義や魅力を感じてもらい将来的に研究医を目指す学生を支援することを目的とした「Lab 部会」という委員会を設置し活動しています。この魅力発信セミナーは，これまで MD-PhD コース同窓会が中心となり開催してきましたが，今後は Lab 部会との協力のもと対象を更に広げることを検討しています。その中で総合型選抜「四国定着研究医型」の枠組みから，学部学生が研究活動に触れる「Student Lab」，そして「MD-PhD コース」に至るまで，徳島大学医学部が設ける研究医養成のため取り組みを知ってもらい，その魅力を感じてもらえるセミナーにしていきたいと考えております。

最後になりましたが，今後も本コースへの変わらぬご支援を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。最後になりましたが，本会開催にあたりご尽力いただきました AWA サポートセンター，医学部教育支援センター，高等教育研究センターアドミッション部門の皆様に心より御礼申し上げます。

第９回近況報告会

青藍会学生広報委員紹介

青藍会学生広報委員就任のご挨拶

天　野　利　哉（医学科３年）

この度，青藍会学生広報委員になりました，医学科３年の天野利哉です。徳島大学に入学してからはや２年が経過しました。学業面では対面授業や実習が充実しており，課外活動も楽しく行えています。１年生の時と比べて２年生ではより専門的な講義が増え，解剖実習も行いました。実習などを通して友達とたくさん話す機会を持つことができ，同期や先生方との会話も多くなりました。３年生では研究室配属もあり，より充実した学生生活が送れると思うとワクワクしています。青藍会学生広報委員として，先生方と学生とのつながりを保ち，学生のことをたくさん知ってもらえるように頑張りますので，よろしくお願いいたします。

青藍会学生広報委員就任のご挨拶

小　林　由紀彦（医学科３年）

青藍会学生広報委員に任命されました医学科３年の小林由紀彦です。

徳島大学に入学してから２年が経過し，ようやく大学生活にも慣れてきました。勉学や友人関係など，環境に恵まれて充実した日々を送れています。

大学では高校と違い，一人暮らしでの生活や大学での勉強といった，自分の様々な行動に責任が付くようになりました。親の庇護を存分に受けながら育ってきた私にとって責任はとても重たいもので，社会に出て働き始めると自分の全ての行動の責任を背負わなければいけないと考えると，恐ろしく思います。この公報にも責任をもって職務に邁進する所存でありますので，青藍会の先生方にはご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いします。

学生だより

全医体優勝について

平　野　和　樹（医学科５年）

蔵本弓道部前主将の平野和樹です。

10月28日，29日に秋田県立武道館にて行われました第54回全日本医科学生体育大会王座決定戦にて団体優勝と個人５，６位入賞を収めることができましたことをご報告させていただきます。

本大会は参加者全員が医学生であり，学業との兼ね合いで距離的にも日程的にも参加が難しい大学が多い中，徳島大学は様々な方々の支えもあり個人戦を含めほとんどの部員が出場することができました。これは今回の結果にとても大きな意味があったと思います。団体戦は全員が出場するわけではありませんが部員全員がどんな形でも必ず関わっており，団体の自信となり力になったと考えています。私たちは西医体を終えてから「和をもって貴しとなす」という言葉を大事にしてきました。ここまで新たに悩みが生まれたり，自信を無くしたりすることがあった際に互いに助け合い，そして尊重することでお互いを高め合いながら練習に取り組んできました。一つ一つの言葉の掛け合いや行動は小さなものであったかもしれませんが全国の舞台で少しの差を生んだのは尊敬の念であると振り返って感じます。競技への関わり方は物理的な指導だけでなく，不安や喜び，疑問を共有すること，ちょっとした心境の変化を支えることも１つの関わり方であります。お互いが補い合い，助け合うことがひいては競技のパフォーマンスに活きてきたと思います。このような当たり前ではないですが見えにくいものの積み重ねを今後とも大切にしていきたいと思っています。

そして大会での緊張感や他大学との交流は私たちを大きく成長させ，今後の部活動生活，人生の糧となるものでありました。

今大会の結果により次年度の全日本医科学生体育大会王座決定戦に出場できることとなりました。今後とも本年度の経験を活かし，良い報告ができるよう練習に励んでまいります。

最後になりましたが日頃よりご支援いただいております青藍会の皆様，大学関係者の皆様をはじめとする全ての方々に感謝を申し上げます。そしてこのような場を設けてくださったことに感謝申し上げます。

西日本医科学生総合体育大会を終えて

水泳部
石　田　卓　朗（医学科４年）

こんにちは。令和４年８月から一年間，主将を務めさせていただきました，石田卓朗と申します。

はじめに，これまで水泳部が毎年活動できていますのは，青藍会を含む多くの先生方や水泳部 OB，先輩方にご支援いただいているからこそです。この場をお借りして心から感謝申し上げます。

この度の第75回西日本医科学生総合体育大会は，８月18日から20日までの３日間，京都府京都市京都アクアリーナにて行われました。以下に本大会の結果をご報告させていただきます。

女子100m背泳ぎ　優　勝　三久翠子
女子50m背泳ぎ　優　勝　三久翠子
男子100m平泳ぎ　準優勝　富岡優

今大会は新型コロナウイルス感染症の流行により４年ぶりの開催となりました。多くの部員が初めての西医体という舞台に臨み，それぞれ得られるものがあったのではないでしょうか。西日本の医科学生が一堂に会し，競い合い，交流し合えたことは何事にも変えがたい経験になったと思います。

大会当日は，多くの部員が良い緊張感の中で試合に挑めたかと思います。度重なる中止により西医体への出場を心待ちにしていた者，初めての大きな大会への出場だった者，皆が協力しあい，良いチームワークで一丸となって競技に挑むことができたからこその良いタイムだったのではないか，と考えます。

この結果に喜びを感じると同時に，長い間大会が開催されなかった状況から抜け出し，試合に臨むことの意義を改めて感じました。コロナ禍の影響で大会が中止されることが相次いでいた中，西日本医科学生総合体育大会が開催されたことは大きな意味を持ちました。その中で，他大学との交流を通じて刺激を受け，今後の成長に繋げることができました。

また，重ね重ね，大会の運営に携わった方々，そして応援してくださった皆様に心から感謝申し上げます。今後はより一層活動の幅が広がっていくことと思いますので，今後とも暖かいご支援いただけましたら幸いです。

最後になりますが改めましてこのような報告の場を設けていただき感謝申し上げます。

ありがとうございました。

左：富岡優（２年）　右：三久翠子（１年）

地域医療の実践に向けて

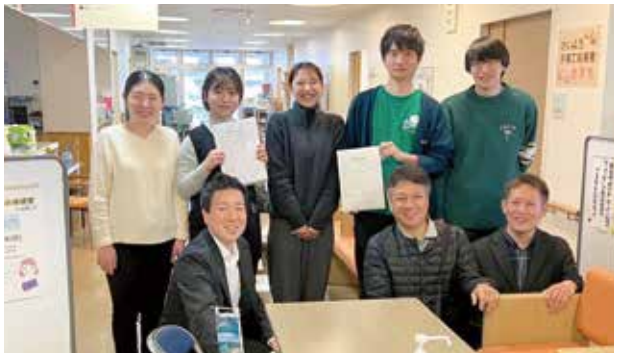
佐　藤　　薫（医学科６年）

こんにちは。医学科６年の佐藤薫と申します。地域医療研究会，通称 T-CoM（Tokushima Community of Medicine）の活動をご紹介いたします。T-CoM は地域医療に貢献できる医療従事者になるために，総合診療や徳島各地の医療・魅力について知ることを目的に結成されました。主な活動としては，徳島県内の医療施設や介護施設を見学し，その現状を知り，課題や解決策を考えることです。学外の活動としては，実際に足を運びその地域の方々のお話を聞いたり，その地域の文化に触れたりすることで地域特有の課題やその土地の魅力を学んでいます。例えば，勝浦町でのミカン狩り，海陽町でのかつおのたたき体験などを経験させていただきました。学内では，定期的に総合診療について学ぶ機会として SAKURA-GM カンファレンスを開催し，実際に臨床現場で働かれている先生のご指導の下，臨床推論やミニ講義に取り組んでいます。この活動は，コロナ禍で対面での活動が困難な時もオンラインで続けることができ，まだ臨床現場で実習していない学年にとっても非常に有意義な時間となっています。そして，徳島といえば阿波踊りということで「地医輝連」として参加しています。踊りを通して，メンバー間はもちろん，自治医科大学の方とも交流し，お互いに切磋琢磨しながら徳島の文化を味わっています。

地域医療を行うには，まずその地域を知る必要があるということで始めた活動を１つご紹介します。その名も「学生くらしの保健室」です。海陽町の健診に参加して住民の方々にお話を伺いました。海陽町は徳島市内から車で約２時間と離れた場所に位置しています。交通面の課題として，公共交通機関の少なさ，店の偏在などに不便さを感じているようでした。これは海陽町に限らず，徳島県は車が欠かせない地域であることを改めて感じました。そして私たちが特に驚いたのは，お寿司におはぎ，赤飯にゴマ塩，ちらし寿司にピーナッツ，サツマイモは常食などの食文化でした。運動不足に加え，炭水化物や塩分の摂取過多は生活習慣病のリスクです。これがこの地域特有の解決すべき課題です。健康は食生活や運動習慣と密接に関係しているため，これらの是正が健康増進への第一歩なので，長年の食文化をどう改善していくかを考えています。一方で，良い気づきもありました。町からの無料クーポンの配布により健診受診率が高いことです。さらに，お話を聞いている中で,「どういう運動がええの？」「この薬ってずっと飲まなあかんやつ？」「毎日ヨーグルト食べよんよ」など，率直にお話ししてくださり，独自の健康習慣や主治医に言っていない秘密など学生だからこそ聞けたお話も多くあり，健康意識の高さも感じました。中には，知識不足で質問に答えられず悔しい思いをした学生もおり，ますます意欲的に学習に取り組む良い機会にもなりました。この活動の中で，事前準備として行政の皆さんから現状を教えていただいたことで，医療と行政の関わりや取組についても学べたこと，何よりそこに暮らす人を知ることができてよかったです。

地域医療にはそこに暮らす「人」や「環境」を知ることが重要だと思います。将来，地域医療を実践できるように学生のうちから様々な地域の人や環境に触れることで幅広い視野を培っていきたいと考えています。協力してくださる地域の皆さんに感謝の気持ちを忘れず，私たちの活動が少しでも地域医療に貢献できるようにこれからも努力して参ります。

くらしの保健室で住民の相談に応じるサークルのメンバー



第１回学生くらしの保健室

青藍会の動き

青藍会出身教授一覧

（令和６年４月１日現在）

氏名	期	大学名	講座
田村　禎通	17	徳島文理大学	人間生活学部
東　敬次郎	26	徳島文理大学	看護学科
斧　康雄	27	帝京平成大学	健康メディカル学部
川上　照彦	27	吉備国際大学	理学療法学科
下泉　秀夫	28	国際医療福祉大学	医療福祉
上田　夏生	29	香川大学	生化学
宇野　昌明	29	川崎医療福祉大学	総合教育センター
横越　浩	30	四国大学	生活科学部
橋本　健志	30	神戸大学	保健学研究科
勢井　宏義	30	徳島大学	統合生理学
安井　敏之	30	徳島大学	生殖補助･更年期医療学
森　健治	30	徳島大学	子どもの保健・看護学
石堂　一巳	31	徳島文理大学	健康科学研究所
上野　修一	31	愛媛大学	精神神経科学
赤池　雅史	31	徳島大学	医療教育学
鈴江　毅	31	静岡大学	教育学部
三上　靖夫	31	京都府立医科大学	リハビリテーション医学
原田　雅史	32	徳島大学	放射線医学
高橋　吉孝	32	岡山県立大学	栄養学科
寶學　英隆	32	奈良先端科学技術大学院大学	保健管理センター
川人　宏次	32	自治医科大学	心臓血管外科
楊河　宏章	32	徳島文理大学	看護学科
吉栖　正典	33	奈良県立医科大学	薬理学
二川　健	33	徳島大学	生体栄養学
岡久　稔也	33	徳島大学	地域総合医療学
浦上　淳	33	川崎医科大学	総合医療センター外科
坂東　良美	33	徳島大学	病理部
山口　文徳	33	愛媛県立医療技術大学	生体機能検査学
久保　宜明	34	徳島大学	皮膚科学
西岡　安彦	34	徳島大学	呼吸器・膠原病内科学
西良　浩一	34	徳島大学	運動機能外科学
橋本　一郎	34	徳島大学	形成外科学
志馬　伸朗	34	広島大学	救急集中治療医学
篠原　勉	34	徳島大学	地域呼吸器･総合内科学
田中　克浩	34	川崎医科大学	乳腺甲状腺外科
髙橋　章	35	徳島大学	予防環境栄養学
松田　純子	35	川崎医科大学	病態代謝学
相澤　徹	35	高知リハビリテーション専門職大学	リハビリテーション学部
堀井　新	35	新潟大学	耳鼻咽喉科･頭頸部外科学
篠原　尚	35	兵庫医科大学	上部消化管外科
早渕　康信	35	徳島大学	地域小児科診療部
安友　康二	36	徳島大学	生体防御医学
矢野　聖二	36	金沢大学	腫瘍内科/腫瘍外科
井原　義人	36	和歌山県立医科大学	生化学
田中　克哉	36	徳島大学	麻酔・疼痛治療医学
岩田　貴	36	徳島大学	創成科学教育
松崎　健司	36	徳島文理大学	診療放射線学科
住谷さつき	36	徳島大学	キャンパスライフ健康支援センターアクセシビリティ支援部門
上原　久典	36	徳島大学	病理部
岡本　康裕	36	鹿児島大学	小児科学
粟飯原賢一	37	徳島大学	実践地域診療・医科学
小山　文彦	37	東邦大学	産業精神保健・職場復帰支援センター
川人　伸次	37	徳島大学	歯科麻酔学
中村　教泰	38	山口大学	器官解剖学
遠藤　逸朗	38	徳島大学	生体機能解析学
添木　武	38	徳島大学	実践地域診療・医科学
上村　浩一	38	兵庫県立大学	保健医療福祉系
友竹　正人	39	徳島大学	メンタルヘルス支援学
桑原　知巳	39	香川大学	分子微生物学
前川　洋一	39	岐阜大学	寄生虫学・感染学
奥村　裕司	39	相模女子大学	健康栄養学科
松浦　哲也	39	徳島大学	リハビリテーション部
井﨑ゆみ子	39	徳島大学	キャンパスライフ健康支援センター保健管理部門
大林　茂	39	埼玉医科大学	リハビリテーション科
埴淵　昌毅	39	徳島大学	地域呼吸器・血液・代謝内科学
大塚　秀樹	40	徳島大学	画像医学・核医学
山田　博胤	40	徳島大学	地域循環器内科学
和泉　唯信	41	徳島大学	臨床神経科学
若林　英樹	41	三重大学	家庭医療学
漆原　真樹	41	徳島大学	小児科学
大日　輝記	42	香川大学	皮膚科学
滝沢　宏光	42	徳島大学	胸部・内分泌・腫瘍外科学
大藤　純	43	徳島大学	救急集中治療医学
堤　保夫	43	広島大学	麻酔蘇生学
酒井　紀典	43	徳島大学	高度先進整形外科診療部
池田　康将	43	徳島大学	薬理学
北村　嘉章	43	徳島大学	耳鼻咽喉科学
酒井　陽子	43	徳島大学	麻酔科診療部
池本　哲也	44	徳島大学	安全管理部
石川　正和	44	香川大学	整形外科学
伊藤　弘道	45	鳴門教育大学	特別支援教育
森岡　久尚	45	徳島大学	公衆衛生学
岡田　賢	45	広島大学	小児科学
辻川　哲也	45	福井大学	放射線医学
沼田　周助	46	徳島大学	精神医学
島原　佑介	47	東京医科大学	心臓血管外科
岩佐　武	48	徳島大学	産科婦人科学
中村　信元	48	徳島大学	実践地域診療・医科学
西　正暁	51	徳島大学	実践地域診療・医科学

※特任教授含む

病院長就任のご挨拶

ご挨拶

香川県立丸亀病院院長
伊　藤　嘉　信（医学部40期）

令和５年９月１日より長楽鉄乃祐前院長の後任として香川県立丸亀病院院長を拝命致しました伊藤嘉信です。青藍会の皆様に謹んでご挨拶申し上げます。

私は1994年に徳島大学医学部を卒業後，徳島大学精神神経科教室に入局して，４年間教室でお世話になったのち，1998年から香川県立丸亀病院に，2002年からは高松市民病院に，そして2007年から再び香川県立丸亀病院に赴任し，現在に至っております。徳島県出身ではありますが，卒後の精神科臨床医としての経験はそのほとんどを香川県で積んでおり，徳島とは縁遠くなっておりますが，今でも徳島県人のアイデンティティは保っているつもりでおります。

丸亀病院は約150床の精神科病床を備えた精神科単科病院で，統合失調症やうつ病，認知症，各種依存症など種々の精神疾患を幅広く診療しており，香川県内の処遇困難な患者にも対応し，さらに刑事事件に係る精神鑑定も積極的に行っております。また病気の再発予防や機能回復を図るデイケアや作業療法，生活支援を行う訪問看護など，社会復帰促進の取り組みも行っております。昔と比べると精神科の敷居は低くなっており，特に最近の若者は精神科受診への抵抗がない人も多く，生活上の悩み相談の目的で来院される方も増えております。このようなニーズに応えるべく，香川県内の精神科医療の中核として，当院をさらに発展させていく所存ですので，青藍会の皆様には今後ともご指導，ご鞭撻の程，よろしくお願い申し上げます。

ご挨拶

徳島県鳴門病院病院長
住　友　正　幸（医学部27期）

令和６年４月より，邉見達彦前病院長の後任として徳島県鳴門病院の病院長を拝命しました。徳島県立三好病院に務めさせていただいたあと，迷世院長？として東祖谷，木頭，北川，木沢の各診療所，上那賀病院から特別養護老人ホーム訪問診療などの支援に回らせていただき，地域医療･介護に浸っておりましたところ，縁あってこの歴史ある徳島県鳴門病院に迎えていただくことになりました。

当院は，従前より吉野川北岸における唯一の急性期中核病院として，県内はもとより，一部東讃，淡路島を診療圏として医療を展開して参りました。地域に深刻化する小児・周産期医療，救急医療といった政策医療に加え，手の外科センター，脊椎脊髄センター，糖尿病・内分泌センターは高度医療を担っています。本年２月に開設された地域包括ケア病棟は，高齢化・介護時代を見据え，病気になっても切れ目なく，QOL を保った生活を支えてゆく仕組み作りに挑戦しています。今年着工予定のヘリポート，そして防潮壁など，地域と連携した救急・災害医療にもより力を注いで参ります。青藍会の皆様におかれましては，今後ともご指導，ご鞭撻を賜りますよう，よろしくお願い申し上げます。

事務局からのお願い

◆　個人情報の取り扱いについて　◆

平成17年から個人情報保護法が施行され，個人情報は厳重に取り扱うことが求められています。青藍会事務局におきましても，会員の個人情報は慎重に管理し，取り扱いにつきましては細心の注意を払っております。従いまして，**電話等での会員情報の提供につきましては原則お断りさせていただいております。**会員のプライバシー保護とトラブル防止のため，より一層のご理解とご協力を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。電子化の昨今ではございますが，会員名簿及び会報「会員の異動」を大いにご活用ください。

現住所および勤務先等に変更がございましたら，会報末尾に綴じ込みの「会員情報変更届」にてご連絡をお願いいたします。（青藍会ホームページ「会員のページ」からも入力可能です。）

◆　勧誘電話にご注意ください　◆

最近，**青藍会の名前を利用したマンションの勧誘電話があったとの報告がございました。**国土交通省のホームページにもマンションの悪質勧誘についての注意喚起が掲載されており，以前にも増して勧誘電話が増えているようです。くれぐれも悪質な勧誘電話にはご注意ください。

過去には「青藍会事務局の〇〇です。会費のことで・・・」という青藍会事務局事務員になりすましたニセ電話の事例も数件報告されております。また「青藍会の〇〇です。」「医学部第〇期卒の〇〇です。」「徳島大学の〇〇です。」「〇〇病院の〇〇です。」という同窓生や「青藍会のお荷物のことで・・・」という宅配便業者になりすましたニセ電話の報告もございました。電話の内容によりますと青藍会に関する情報に詳しい場合がございます。青藍会では突然の電話による会費のご案内や個人情報の照会はいたしておりませんので十分お気をつけくださいますようお願い申し上げます。勤務先及びご家族（帰省先）の皆様にも注意の呼びかけをお願いいたします。

くれぐれもなりすましのニセ電話にはご注意ください！！

様々な情報をお寄せください

青藍会ホームページには「お問い合わせ」を設けております。

・同窓会の開催の予定や案内，開催後のご報告
・同期の方の動向，慶弔，メディアにとりあげられたことなど
（青藍会会員の先生がご逝去されました折には，物故者の項にてお知らせさせていただきます）
・青藍会に関するご意見など

会報やホームページにて情報発信していくことができれば幸甚に存じます。

青藍会事務局　seiran@tokushima-u.ac.jp

青藍会ホームページ

よろしくお願いいたします

投稿規定

広 報 委 員 会

○ 原稿について

●必ず，文頭にタイトル，氏名・卒業期をご記載ください。
　例　タイトル ○ ○ ○ ○ ○ ○　　山　田　太　郎（医学部○期）

●**文字数は1,400字以内，写真（カラー）は１枚でお願いいたします。**
なお，写真には見出しあるいは説明文を必ずつけてください。

●英数字は半角文字で，カタカナは全角文字で入力してください。

●原稿の文中に登場する氏名及び敬称については，スペースを入れずに記載してください。
（例　山田太郎君　　高倉健さん　　松下幸之助先生）

○ 原稿及び写真の送付について（青藍会事務局 seiran@tokushima-u.ac.jp）

●原稿送付は，可能な限りメール添付または電子媒体にてお送りください。
プリントされた写真については，郵送にてお送りください。後日，返送いたします。

●画像ファイルを送付される場合は，**原稿とは別に，JPEG ファイル等でお送りください。**
原稿（Word 等）に貼り付けますと，画質が悪くなります。
なお，画像ファイルの容量が大き過ぎますと届かないことがございます。容量を小さくして１枚ずつに分けてお送りください。また，**青藍会事務局からの連絡がなかった場合は，届いていないことが考えられますので，再度確認のご連絡をお願いいたします。**

○ 原稿の締め切り日を厳守願います（次号104号の締め切り日は令和６年９月27日（金）です）

会報の印刷および製本には，原稿をお預かりした後，ゲラ刷り作成，校正，修正，編集会議等で２ヶ月ほどの時間を必要といたします。
締め切り日より遅れた場合は，次号の掲載になりますので予めご了承ください。

○ 編集作業について

●お送りいただきました原稿は語句などに関して広報委員会で校閲させていただきます。その結果，修正をお願いする場合もございますことをご了承おきください。

●用語や表記などの統一のために文章に手を入れることがございます。予めご了承ください。

○ 原稿校正について

●広報委員会で会報全頁のレイアウト等を校正後，製本前のゲラ刷りを作成しお送りさせていただきますので，著者校正をお願いいたします。

●**校正時の大幅な追記，削除等は，会報発行期日に影響いたしますので，ご遠慮くださいますようよろしくお願い申し上げます。**

第41回青藍会・医学科講演会開催のお知らせ

第41回青藍会・医学科講演会を開催いたします。多数のご参加をお待ちしています。

日　時　令和６年10月25日（金）18時30分～20時
場　所　徳島大学藤井節郎記念ホール（蔵本キャンパス）
座　長　秦 広樹 先生（徳島大学大学院医歯薬学研究部心臓血管外科学分野教授）

講 師　**澤 芳樹　先生**

大阪大学名誉教授
大阪大学大学院医学系研究科
未来医療学寄附講座 特任教授
社会医療法人警和会　理事長
大阪警察病院　院長

演 題　**「医学のレジリエンス**
～みらいへの挑戦と貢献～」

澤芳樹先生ご略歴

1980（昭和55）年３月	大阪大学医学部卒業
1980（昭和55）年４月	大阪大学医学部第一外科入局
1989（平成元）年10月	フンボルト財団奨学生としてドイツMax- Planck研究所 心臓生理学部門心臓外科部門に留学
1992（平成４）年２月	大阪大学医学部第一外科 助手
1998（平成10）年４月	大阪大学医学部第一外科 講師
2002（平成14）年８月	大阪大学医学部臓器制御外科（第一外科）助教授 附属病院未来医療センター副センター長
2006（平成18）年１月	大阪大学大学院医学系研究科　外科学講座 心臓血管・呼吸器外科（第１外科）主任教授
４月	大阪大学医学部附属病院未来医療センター センター長（～平成22年３月末）
2007（平成19）年４月	心臓血管外科主任教授（外科講座再編にともなう）科長（～令和３年３月末）
2010（平成22）年６月	大阪大学臨床医工学融合研究教育センター センター長（～平成27年３月末）
８月	大阪大学医学部附属病院 未来医療開発部 部長（～平成27年３月末）
2011（平成23）年１月	内閣府 医療イノベーション推進室 次長（～平成25年３月末）
2015（平成27）年３月	一般社団法人日本再生医療学会 理事長
４月	大阪大学大学院医学系研究科 研究科長・医学部長（～平成29年３月末）
2019（令和元）年11月	特定非営利活動法人日本胸部外科学会 理事長（～現在）
2021（令和３）年９月	大阪警察病院　院長
2023（令和５）年４月	社会医療法人 警和会　理事長
７月	一般社団法人 未来医療推進機構　理事

最新の情報につきましては青藍会ホームページをご覧ください。
青藍会ホームページ
https://www.seirankai-tokushima.jp/

共催　青　藍　会
　　医　学　科

編　集　後　記

３年余にわたるコロナ禍や，弱小開業医はやめろといわんばかりの診療報酬改定に翻弄され，還暦過ぎた自分の医者人生を今後どのように閉じていくかを考える日々です。

５月の連休は大学の同期３人＋そのムスメと博多の街で遊びました。医学を熱く語るムスメは，まぶしく輝いておりました。自分にもこんなピカピカした時代があったのか。志を貫き，ベルツ賞１等賞を受賞された西岡安彦教授も同じ34期です。昨年末お会いしたときに臨床や研究を語る彼の目には，若いムスメと同じようないきいきとした光がありました。誇りに思います。おめでとう！自分ももう一踏ん張りしてキャリアを伸ばしていこう。

今号も，青藍会のみなさまのご活躍，支部や学生さんの活動，病院だより，同窓会報告など盛りだくさんの内容になっております。100号を期に表紙もスッキリ変わりました。昨年は夫の31期同窓会にこっそり便乗し初めて琵琶湖に。「にほ照るや　凪ぎたる朝に　見渡せば　漕ぎゆく跡の　浪だにもなし（西行）」幹事さま企画してくださってありがとうございました。書籍紹介では拙書に同期の橋本一郎広報委員長が最高の書評を書いてくださいました。げに有難きは人の縁。私が広報委員として編集にたずさわるのはこれが最後となります。活動を通してお知り合いになった方達に感謝するとともに，青藍会のみなさまに幸多からんことをお祈りいたします。

高　橋　浩　子（医学部34期）

編　集　広報委員　橋本　一郎（34期）　大塚　秀樹（40期）　工藤美千代（33期）　高橋　浩子（34期）
田中　克哉（36期）　板東　　浩（27期）　森岡　久尚（45期）
学生広報委員　天野　利哉（医学科３年）　小林由紀彦（医学科３年）

非　売　品

青藍会会報第103号

令和６年６月３日印刷
令和６年６月10日発行

発　行　徳島大学医学部医学科同窓会青藍会
〒770－8503　徳島市蔵本町３丁目18－15
電話（088）633－7109（内線2601）
FAX（088）633－3180（青藍会事務室）
E-Mail　seiran@tokushima-u.ac.jp
URL　https://www.seirankai-tokushima.jp/
振替　01680－4－8671
ゆうちょ銀行 一六九店（169）
当座 0008671 青藍会

発行者　青藍会会長　荒　瀬　誠　治

印刷所　グランド印刷株式会社
徳島市万代町６丁目20－15　電話（088）622－8448